

大浦村における家庭での神行事について

岡本恵昭

○イチバンチョウ（パライウサギ）

旧1月より5月までの村の各家々で行なう家庭でのヤフパライウサギである。年中行事の中で家単位でのヤフパライの始まりが、家庭の神願いの始まりで、「イチバンチョウ」と呼んでいる。村の各家庭では吉日を選び、ウプラダシ、マジルンマの2名のサスンマより1名のヤーザス（相性の良い神女）を選ぶ。このパライウサギは、家の主婦が中心に日取をする。神願いの用意は、ヤフパライに用いる海水で、近くの海岸より「スウ（潮）クミ」を7回、波のパナ（華）をすくって来る。これを「ウプス」という。次に、早朝に近くの浜に出て、清められた人の足あとのない砂浜より白砂を7回にわたって採集して来る。次に、マカヤにてサンをつくる。マカヤのサンとマーニ（クロツツ）の先端を切りとってマータ（ミーマータ ウギヤ）を加える。その上にヤラブ木の葉をそえて厄拂いの呪具をつくる。家での願いンマ（ヤーダスンマ）は最初にマウダナで神願いをする。塩、洗い米、米（パナ）を供えてパライネガイをする。それが終わると、家、屋敷内外を塩水（ウプス）をもって清浄にする。部落の災害拂い願いは、旧2月のヤフダミニガイとムスルンがあるが、特に悪口の入った家庭からのヤフを追い出す。悪口（ヤナフツ。フツ）パライは、村のヤー

ギザスとして依頼するウプラダシンマ、マジルンマの2名に家々を祈願してもらう。今日では、ウプラダシ、マジルンマの身体の具合で多くの家庭の神願いが出来ないので、他の村のユタヤツカサンマに依頼して行うという。この祭事をヤーパラズ（家屋の厄拂い）ともいっている。

○ヤフダミニガイ

旧2月に部落の災害を拂い出すニガイ（祭祀）がある。サスンマ（12名）が中心で御嶽で行う。

○タスキニガイータスキブンニガイのこと

家庭のタスキブンのニガイである。この1年、家族の人々の個人個人の健康祈願を中心に神願いをする。村のヤーザスンマ（ウプラダシ、マジルンマを中心に12名のサスンマ）の神願いによって、家族の相性のあるトイイダシ日取をする。主として、家庭に祭ってあるマウダナを中心にニガイをする。この時の供え物として、洗い米、塩、花米、酒が準備されるが、サギブーイという一種の供物が幾重にもつくられる。アダナス縄の直線に一列にタコや乾燥したイカのクンセイをぶらさげおくものがある。それらの吊げブーイをつるして、神への願い立てをする。これらの供え物は願事の終了の時には、サギブーイと共に村の境界の南はてに捨てるという。他の村で

のクンセイがそのまま供えられてタスキブンのニガイをする。

○カンミョーイ

旧暦9月より12月までの期間に、個人の守護神であるマウ神をお供することをいう。マウウサギともマウカミともされる。家庭の中で主として今日では成人の男女が一身上の具合で守護神をお供して信仰することをマウをかみる又はンマリニー（生れ根）を拜むともいう。ンマリニーは、村や里の御嶽で、自分をつくった人—祖先神—マウ神のことである。マウガンは個人一代の守護神であり、世の神であり、職業神でもある。香炉と茶場、酒等の祭器が供えられて毎日信仰される。マウ神は、宮古島独自の信仰形態でありその生や儀礼、マウガンと個人の人生通過儀礼などと密接なつながりがある。マウ神は、家ザスやサスンマなどから選ばれるが、その他に村以外の相性の合うユタに依頼してお供してもらう。12名のサスンマが主として、マウを供するサスになるが、マウ神は生れニーの御嶽の神の名前神くじによって、父方や母方の祖先の名前世の主など神名を決定する。マウ神の名前は本人の生涯の守護神の名前となる。通称「マウ神」「ンマリニー」と称するのみである。こうした生涯にわたって信仰を継承する神の香炉をマウ香炉という。マウ香炉は、マウ棚の聖域を定め固定した場所に置く。大浦は拂壇の左側にマウ香炉やンマリニーの香炉が配置されている。

○マルミウサギ

一年中の部落行事が終了したということを神々に報告するまつり。マルミとは、祈願行

事の無事終了、まんさんを意味する。日を選んで冬至まで行う。サスンマのみの神事。

以上